

## ロブザンダンジンの反乱について

佐藤 長

【要約】 雍正元年に青海で起ったロブザンダンジンの反乱については、従来充分な研究が行われたことがなく、清朝史の概説書などでも、辺境に起った小反乱として記載されるだけである。しかしこの反乱の討伐によって清朝は初めてこの地方に旗制を布き、その領域に繰入れることに成功した。本稿はその乱の原因、経過並に結果を検討し、グシハンの青海征服以来のホシヨト族の活動が、ここで完全にピリオドを打ったことを明かにする。

史林 第五五巻第六号 一九七二年一月

康熙五十六年(一七一七)にチベットの首府ラサで一大異変が起った。即ちシユンガルの王ツェワンアラブダンTsewang arabdanへTshe dhan rab dhanは、部下のツェリンドンドンTsering dondubへTshe rin don grubに六千の兵を授け、ラサを急襲せし、チベット王ラザンンンLadzang qanへLha bzai khanを殺し、ラザンの立てたダライラマ、イシーギヤムツォ Ye ges rgya mtshoを幽閉した。この事件は西北辺境の諸民族に深刻な影響を与え、清朝がチベット政局に干渉する一つの大きな契機となった。康熙帝は直に、第十四皇子胤禩を撫遠大將軍として兵をチベットに向わせ、康熙五十九年(一七二〇)には、清軍はラサに入って治安を回復した。事の次第はペテック氏 Luciano Petech の名著CTに詳しく述べられており、ここにそれを繰返す必要はない。

ところでその善後処置は、かなりスムーズに行われたように見えたが、間もなく雍正元年(一七二三)には、清軍入蔵に協力した青海ホシヨト Qosiyud のロンザンダンジン Lobdzang danjinへBlo bzai bstan hdsin が反乱を起し、青海地

方を混乱に陥れ、康熙より雍正への政局の交替期にあった清朝を驚かした。乱そのものは翌年に平ぎ、ロブザンダンジンはジュンガルに逃れて、事態は一応平静に戻ったが、この際、清朝の青海に対してとった処置は抜本的なもので、青海ホシトはこの後、政治的には内蒙古同様の旗制のもとに圧えられ、チベットにも、辺境異民族へも何等影響を与えない無力な存在とされたのである。ロブザンダンジンの反乱そのものは、規模の小さい、史上によく現われる辺境異民族の反乱の一つのように見えるが、これによって青海ホシトの、それまでの活動は大幅に制限され、その存在の意味を完全に変えられた点に、我々は大きな歴史的意義を認めざるを得ない。ここにこの乱を取上げるのも、単に事の経過を探索するのみでなく、曾ては辺境の一大雄族であったホシト部が、清帝国の体制に繰込まれ、その存在を変質せざるを得なかったことを明かにしたいからに他ならぬ。なお文中、人名、地名について確定し得ないものが若干あるが、それらについては博雅の士の示教を請いたいと思う。

一

さてロブザンダンジンの家系から説明してゆこう。彼の父ダシバートル *Dashi Bayatur* はグシハン *Gushi qan, Gu gūi Dulan* の末子に当り、康熙帝が、康熙三十六年十一月に青海諸タイジを招いたときには、一族の最長老として自ら北京に入観した(聖祖実録卷一八六、七丁裏)。当時グシハンの十人の子のうち生存していたのは彼一人であったから、帝は非常に彼を優待し、三十七年正月には和碩親王の爵位を与えたのである(前掲書卷一八七、二丁表)。ロブザンダンジンは康熙三十一年(一六九二)に生れ、康熙五十三年(一七一四)に父の位を嗣いで親王となった<sup>①</sup>。当時親王の位を持つものは、青海では彼のみであったから、青海ホシトのタイジのうちでは彼の系統が最も高い家格を保っていたのである。このことは彼が、大將軍胤禩に付してラサに入ったときの扱いにも表れている。途中で胤禩に代って入蔵軍を指揮したのはヤンシン *Yansin* (延信) であるが、彼は入蔵すると直にチベット仮政府を設置した(一七二〇)。この仮政府はハルへの王侯二人、青海ホ

ショトの王侯二人、チベット貴族の二人計六人で構成されたが (Notes, p. 287)、そのうち青海ホシヨト出身の一人は、正に彼ロブザンダンジンであった。即ち彼はこの時期において、青海ホシヨトの代表的人物と中国側にも考えられていたのである。

尤もそれだからといって、ホシヨト部はグシハンの死後、決してその統一を保持していたわけではない。史上に散見する「ホシヨト八タイジ」の言葉が示すように、青海にあったグシハンの八人の子は、父の遺産たる広大な牧地を分取し、いわば割拠の態勢をなしてそれぞれの勢力圏を持っていた。勿論ホシヨト部長としての、グシハンの長子、第二代のオチルハン・ダヤン Ocir qan Dayan、またはその子の第三代のドライハン・グンチュク Dalai qan Guncuk は確に存在した。しかしペテック氏のいうごとく、前者は「イージーボーイングでチベットの政治的支配は、第五代ドライラマとその執権の手に完全に移り、ホシヨト部長の権利は単なる形式的確認にまで縮小する」ような首長であり、後者は「影の薄い人物で、チベットの執権のひねくれた政略の中では、全く役割を持たなかった人間」であるならば (Notes, pp. 267, 268)、青海ホシヨトを統率する力が彼等にあるはずはなかった。確に二人はラサでチベット王の位には即いたが (Notes, p. 267)、青海を強く支配する力はもはや彼等の手のうちにはなかった。青海がこの頃不統一の状態にあったことは次の二三の例からも証明されるであろう。

第一は、第四代のラザンハンが未だ即位せず、父のドライハンが在世していた頃で、ダンバートルの入朝の行われる直前である。康熙三十六年 (一六九七) に、康熙帝はジュンガル工作の一環として青海タイジを招撫するため、ロロイエムチ Loroï (≡ Bio gros) enci (羅墨額木齊)、アルダルジャイサン Aldar jayisang (阿勒達爾宰桑) 等を遣したが、そのときボシヨクトジノン Boshytu jinong (博碩克圖濟農) はガルダン Galdan ≡ Dgah Idan と縁組していたにも拘らず、彼に降服を薦める工作を引受けた (要略巻一〇、一〇一頁)。またゴンボ Gombu ≡ Mgon po (衰布) もこのとき内附することを願ったが、実は彼は既に清朝のガルダン征討の際、清朝がツェワンアラブダンに送った使者の道案内をし、これに糧秣耽

馬を提供してその行を助けていたのである(要略卷一〇、一二丁表)。一方同年にダライハンは、当時寧夏の安定堡に來駐していた康熙帝のもとに、対ガルダン戦の勝利を祝う使者を出していた(聖祖實錄卷一八一、一六丁表)。

引続き帝は招撫工作のため、額駙のアラブダン Arabdan へ Rab britan (阿喇卜坦)、ラマのチャグナドルジ<sup>④</sup> Phyang na rdo rje (商南多爾濟)を派遣し、彼等は青海東南辺のチャガントロガイ Cayan toloyai<sup>⑤</sup>に至って諸タイジを招集した。ゴンポはこのときダライラマの塔を建設するのに忙しかったため、集会には長子のエルデニエルケトクトネー Erdeni erke toyonai(額爾德尼額爾克托克雍)を出席させた。ところがラザンが兵を以て彼を襲う噂があり、彼は懼れて途中で引歸した。ゴンポはまた次子のポンソク Punsok へ Dhun tshogs を遣したが、ラザンは彼に言った(要略卷一〇、一二丁裏、朔漢卷四〇、三四丁裏)。

「爾の父はひそかに使を出して天朝に内附しようとしているが、青海を裏切るつもりではないのか。もしそれならば、我は兵を起して爾の父と戦おう。」

またラザンはゴンポにも言った。

「爾はひとり天朝に寵せられんことを希っているが、よろしくない。我は青海の諸タイジとともに内附しようと思う。よって兵を引揚げよ。」

この事件は結局、チャンジャホトクト Icañ skya qutuγtu の調停で収拾されたというが、<sup>⑥</sup>このことは、康熙三十六年の頃には青海のタイジ等は各々自由に清朝に服従乃至は協力し、またそれはホシ<sup>⑦</sup>ト部長ダライハンとは連絡はなく、時にはそれと対抗しても自己を主張したことを物語っている。

第二はラザンハンの時代、第七代ダライラマ、カルサンギヤムツォ Skal bzah rgya mtsho がリタン Li than に転じたときのことである。康熙帝の命により、不行跡な第六代ダライ、ツァンヤンギヤムツォ Tshans dbyans rgya mtsho は、ラザンハンによって康熙四十五年(一七〇六)に北京に送られることになった。ダライは青海の南辺クンガーノール

Kun dgan nagur<sup>⑧</sup> まで至ったが、病のためこの年の十月に死んだ(CT, p. 13)。ラザンは既にこのダライを偽ダライであるとして認めず、康熙四十六年(一七〇七)にイシーギヤムツォ Ye ges rgya mtsho を第六代と称してダライの位に即けた。勿論一般のチベット人やラマ等は、このラマを真のダライとは見なさず、先に歿したツァンヤンをやはり第六代と見なしていた。従ってカムのリタンで、ツァンヤンの転生者と考えられるカルサンギヤムツォが出現したときには、これが真の第七代ダライであるとする空気は急速にチベット、青海に広まった。当然ラザンはカルサンを捕えようとしたが、ここで青海ホシヨトがラザンに反撥した。青海ホシヨトはカルサンを真のダライと信じて、これを保護する決心を固めたからである。

康熙五十四年(一七一五)に、青海右翼の有力者チャガندانジン Cagan danjin<sup>⑨</sup> は、「ラザンの立てたイシーギヤムツォは偽ダライであり、リタンに生れたカルサンギヤムツォが真のダライである。」と天子に奏上した。帝は内閣学士の拉都瓊(拉都渾)を遣して事情を調べさせ、ついで侍衛のアチトウ Acitu (阿斉図)をやって青海両翼の諸タイジを集め、リタンのカルサンを紅山寺に移して争端を緩めようとした(聖祖実錄卷二六三、四丁裏)。このときにも諸タイジの意見は二つに分裂した。セブテンジャル Sebtentjal (Tshe brtan rgyal (色布騰扎勒)、アラブダンオンボ Arabdan ombu (Rab btan dbon po (阿喇布坦鄂木布)、ホンクワンジャル Punsuk wangjal (Phun tshogs dban rgyal (朋素克旺扎勒)、ダヤン Dayan (達顔)、スルジャ Surja (索爾扎)は皆、遷すことに賛成した。しかし、チャガندانジンは反対で、ロブザンダンジンと盟約して、兵を以て己れに従わざるものを討とうとした(要略卷一〇、三二丁表)。別の史料によれば、チャガندانジンはこのときロブザンダンジンの煽動を受けて兵を挙げようとしたのであり、チャガンは「惑志」があったが、間もなく罪を悔いて止めたという(要略卷一一、三二丁表)。清朝ではチャガンの牧地が四川松潘の諸路に近いので、詔してその地の兵を待機させた。と同時に青海タイジとの妥協策として、新ダライをクンブム Sku hbum に移すことを決定した。そこでチャガンは畏れ、康熙五十五年三月にカルサンをリタンからクンブムに移したというのが結末であった。そ

の善後策としてアチトッは勅命を以て諸タイジを集めて会盟し、ロブザンダンジン、チャガندانジン、ダヤンに右翼を、エルデニエルケトクトネー、アラブダンオンボに左翼を支配させて永久和睦することを取決めた（聖祖実録卷二六八、五丁表、要略卷一〇、三二丁裏―三三丁表）。そのうち右翼について詳しく言えば、チャガンは松藩の近くの河東に牧し、ロブザンはエムネブルンギル *Emne bulangir*（布隆吉爾河）の近くの河西に牧し、黄河を以て境とすることに決定したのである（要略卷一一、三丁表）。恐らくチャガンは新ドライを、自分の牧地に近い所に置きたかったのであろうし、ロブザンも亦それが清朝の掌中に入るのに抵抗を感じたのであろう。しかしラザンという共同の敵を前にしながら、清軍の圧力によって漸く方向を一にしたのは、なお青海タイジの間で、その不統一性があることを曝露したものに他ならない。ロブザンダンジンが反乱を起した背景には、このような統制のとれない青海の実情があり、それは裏を返せば、それ故に実力を以てこれに号令する可能性がなお存在していたことを示すものであろう。

先に述べたごとく、康熙五十七年（一七一八）十二月に撫遠大將軍胤禩は大軍を率い、カルサンギャムツォを奉じてラサに進発した。五十九年（一七二〇）二月には軍はラサに入り、カルサンは第七代ドライラマとしてポタラ宮に坐牀するようになった。この作戦には大將軍の呼掛にに応じて、殆どの青海諸タイジが従軍してその進撃を助けた（要略卷一〇、三九丁裏―四〇丁表）。而して雍正元年（一七二三）二月には、従軍した青海タイジの主なもの清朝からそれぞれ褒賞を受けている（方略卷一一、雍正元年二月乙亥の条、実録卷四、三二丁裏）。チャガندانジンが親王に封ぜられたのを初め、各々が清朝の爵位を与えられたが、既に親王であるロブザンダンジンは俸銀二百両、緞五疋を与えただけであった。作戦のイニシヤティヴが清軍に握られており、大した戦闘も行われない以上、彼等の功績はそれ程高いはずはない。しかしチャガندانジンは親王に封ぜられた上、一族のダンジン *Danjin*、*Batan hdsin*（丹衷）<sup>15</sup> が間もなく歿した後のその部衆牧地を、天子の命で与えられている（方略卷一一、雍正元年六月戊辰の条、実録卷八、一三三丁表、要略卷一一、二丁裏）。それに比べるとロブザンに対する褒賞は如何にも貧弱なものである。その原因が何であったかは明かでないが、恐らくアチトッの提議があつ

たとき(五頁)、チャガンを煽動して新ダライを移すのに反対したことなどがその原因となつてゐるのかも知れない。

雍正元年七月、遂にロブザンはバルトロガイ Bar(s) tologai (巴爾托羅海)<sup>⑤</sup>に青海の諸タイジと会盟し、自らはダライホンタイジ Dalai qong tayji と名乗り全体を統制し、所部の故号を復し、清朝の与えた王、貝勒、貝子、公等の爵を称することを禁じた(要略卷一、三丁表、方略卷一、元年八月庚午の条、実録卷一〇、二四丁裏)。また使者をジュンガルのツェワンアラブダンに送り、期を定めて戦鬪を開始することを約束した(方略卷一、元年九月己丑の条、実録卷一、一八丁表)。味方するものはチュイラクノムチ Cuyirax (ハ Chos grags) nonci、アラブダンオンボ、ボンソクワンジャル等で(方略卷一、元年七月己卯の条)、愈々彼の反乱が始められたのである。

- ① 彼の生年についてはメテック氏によつて (Notes, p. 289)。タンヌートルの死により、康熙帝が「違旨致祭」したことは、聖祖実録卷二六〇、九丁裏に出ているし、ロブザンダンジンは優秀な人材故に親王位を嗣いだことは、聖祖実録卷二七〇、三〇丁裏に見えてゐる。
- ② ボンショクトジンは、グンハンの第五子イルドゥチ Huduici の子である。ボンショクトの第四子ゲンデル Gender (根特爾) はガルドンの女ツム BunハHbun (布木) と婚してゐた(表伝巻八二、一丁表以下)。
- ③ グンハンの第三子ダランタイ Dalantai の子である。
- ④ 商南多爾濟は難解な語であるが、メテック氏はこれをチェンガドルシハ Spyran sha rdo rje と譯元した (CT, p. 11)。アーテッド氏 Zairuddin Ahmad はチャグナドルシハ Phyang na rdo rje と見るが (STR, p. 274) この方が正しいであらう。
- ⑤ 十三排図において、青海湖の東南辺に見える察罕托羅海である。
- ⑥ メテック氏はこの事件の経過を、要略とサガスター K. Sagaster がスプトエリク Subud erike を要約したものの(筆者未見)によつて
- ⑦ 述べてゐる (Notes, pp. 268, 269)。
- ⑧ 十三排図を見ると、青海湖の南辺に公噶淖爾がある。
- ⑨ チャガンダンジンはボンショクトジノン(註②既出)の第三子でダイテンホンヨチ Daycing qosiyuci (戴青和碩齊)の称号で知られ、右翼の中心人物の一人。前頭旗の祖となつた。
- ⑩ 紅山寺の所在は明かでない。メテック氏はメトラム氏 L. M. J. Sohran の著書 The Mongols of the Kansu-Tibetan Border, II, Philadelphia, 1957, pp. 21-23 に出た『聖壽寺の南六十里の Hung-shan ssu を以てこれに当ててゐる。しかしシェラム氏の拠つた新志卷一五、六丁裏に出てくるこの寺院は『洪善寺』であつて、紅山寺ではない。恐らく音が一致するためにメテック氏は誤つたのであらう。新志の中に紅山寺に當る寺院を探することは困難であるが、同書卷五、一六丁表に紅山なる山名があり、
- ⑪ 在衛治大通城東、其下皆牧地、今徇民墾種、已成田矣。と説明されているから、或はこの山の側にあつたのかも知れない。
- ⑫ ジュンガルのバルトルホンタイジ Bayatur qong tayji の子シヨ

トバートル [Toba (Mtsod pa) bayatur の子であるが、ガルダンがジュンガルの覇権を握ったとき、シヨトバは脱れて青海に至り、ここに遊牧するようになった。後述のごとく、セブテンジャルはロンガンデンジンの乱に際し、清朝に忠誠を尽したため、独立してジャサタとされ、南右翼頭旗の祖となった。

- ⑭ ペテック氏のいうごとく、オチルハン・ダヤンの子ボンソク Punsük (Phun tshogs の子アラフダンオンボである (Notes, p. 284, p. 7)。彼の父ボンソクは領尉アラフダンが、青海タイジ等を招撫したとき、ダライハンに子弟を遣して入朝するのを促したのに応じ、北京に至った。これより朝貢絶えず、よって多羅貝勒に封ぜられたが、アラフダンオンボはその後を康熙四十七年五月に嗣いだものである (表伝巻八六、二丁裏、聖祖実録卷三三三、三丁表)。

- ⑮ グシハンの第六子ダライバートル・ドルジ Dalai bayatur Dorji (Rad rje の曾孫)、西前旗の祖である。
- ⑯ 右ダライバートルの第二子薩楚墨爾根台吉の子である。薩楚墨爾根

台吉をペテック氏は Seen margin taiji とするが (Notes, p. 284, p. 8)。一方アーマッド氏はこれを「第五代ダライ伝により」<sup>1)</sup>「多分 Sa skyon margin taiji であろう」とする (STR, p. 301)。いずれが正しいかは勿急には決定できないが、後者の比定の方が漢字音に近いであろう。

- ⑭ ラザンハンの子である。
- ⑮ ダンジンはチャガندانジンの弟ケンデル (註②既出) の子で、輔国公を授けられていたが、清軍がガルダンを討ったときには所部を遣して糧食を助け、また入藏作戦のときにはこれに従軍した。故を以て固山貝子に封ぜられたが、間もなく死し、後嗣がなかった。ついで郡王に追封されたが、遺言には「部衆および牧地を天子に献上する」とあったため、帝はこれを收納するに忍びず、血縁的に最も近いチャガندانジンの管轄下に置いたという (要略巻一、二丁裏)。
- ⑯ 会盟の場所を要略はチャガントロガイとするが、今は方略、実録の記載に従う。

## 二

反乱の経過は次のごときものであった。第一にロブザンとボンソクワンジヤルの攻撃を受けたのは左翼の有力者エルデニエルケトクトネーであった。彼は交戦四次にわたったが、属人を多く失い、牧畜は掠奪され、妻子を率いて西寧駐在の撫遠大將軍ヤンシン (二頁既出) に助けを求めた。ヤンシンは直にこれを受入れ、蘇油口に暫居させた (方略巻一、元年六月壬戌の条)。一方エルデニの子アラフジ Arabji (Rab rgyas (阿喇卜濟)、ソナムダシ Sonam dashi (Bsod nams bkra gis (索諾木達什) は六七日間戦い、兵五百、妻子等千余口を率いて来投したので、父とともに安居せしめた (方略巻一、元年七月己丑の条、実録巻九、一八丁裏)。ついでガルダndan Galdan dasi (Dgah Idan bkra gis (噶爾丹達什) が



襲われ、弟オチル Ocir (鄂齊爾)、タイジ・アワンダクバ Awang dayba (Nag dbeai grags pa (阿旺達克巴)) とともにアラブダンオンボと戦い、敗れて甘州に逃れて来た。ヤンシンはこれをエルデニエルケトクトネーと暫く同居させた(前掲書)。

これらの報告を受けた雍正帝は兵部左侍郎の常寿<sup>②</sup>(西寧駐在)を遣して、自ら行き、或は有能の官吏またはラマをやつて和解させるよう、また川陝総督の年羹堯(西安駐在)と相談して事を行うことを命じた(方略卷二一、元年七月己卯の条、実録卷九、一丁裏)。帝がロブザンの身分、功績を思い、なるべく円満に事態を收拾することを希望していたことは疑なく、ヤンシンへの論旨にも(実録卷九、一三三丁裏)、

その罪は未だ明かでないから、直に征討を加えるには忍びないものがある。已に侍郎の常寿を遣わし、ロブザンダンジンの所行の事情を問わせているが、もしロブザンが罪を知つて過ちを悔いるならば、朕はその是非を定め、爾等を和解せしめ、爾兄弟を旧居に照して青海に居住せしめよう。

と言っている程である。しかし常寿は、ロブザンの意図は、最初にエルデニエルケトクトネーを滅し、ついでチャガンダンジンを逐い、その後衆タイジを集めて、彼にハン号を賜わらることを朝廷に願ひ、チベットに駐在し、青海を遙制せんとするもので、「叛形已に見る」と報告している。また常寿は周到にも、ジュンガルとの連絡を調べたが、人々の言では、ジュンガルは青海人を信ずるに足りないとし、一方ジュンガルの兵は既にガスロ「Gasro」に來り、九月には青海に到着するであろう等と言う故、注意する必要があると述べている(方略卷二一、元年八月庚午の条、実録卷一〇、二四丁表)。ロブザンがジュンガルと連絡をとつたが、多分信用されなかつたであろうことは年羹堯も既に推測していた(奏摺上、二三頁)。

そこで帝は、ロブザンがチャガンに決戦を挑むのを防ぐため、西寧の兵を以て、ロブザンが黄河を渡つて南進したところ、その後方を遮断することにし、一方四川提督の岳鍾琪に松潘の兵を以てチャガンを応援することを命じ、西路の軍務全体を年羹堯に弁理させることにした(方略卷二一、元年八月甲戌の条、実録卷一〇、二八丁裏)。ところがロブザンは直に

黄河を渡り、チャガンを攻め(方略卷二二、元年九月己丑の条、実録卷一一、一八丁表)、チャガンは対峙することができず、妻子、属人百余人を連れて、河州の老鴉関に逃れてきた。常寿はこれを辺内に迎え入れたが(奏摺上二二頁、方略卷二二、元年八月甲戌の条、実録卷一〇、二九丁表)、チャガンは後に十一月には更に蘭州に移された(方略卷二二、元年十一月丁亥の条、実録卷一三、一〇丁裏)。年羹堯は、チャガンの兵力がロブザンに匹敵し、エルデニエルケのような非力なとは断じて異なるという見方であったが(奏摺上、二二頁)、そのチャガンにしてこの有様であったのである。

ここに清朝も遂に大軍を動かす決心をし、年羹堯を撫遠大將軍とし、ヤンシンを平逆將軍、岳鍾琪を奮威將軍として兵を率いて討伐に向わせることになった(方略卷二二、元年十月戊申の条、実録卷二二、二丁表)。年羹堯は既に元年九月二十日に甘州から起程し、十月の初旬には西寧に至った(前掲書)。年羹堯は中心的な兵力を西寧に置き、チャムド Chabso mdo (察木多) の総兵官周瑛に青海から入藏する道を絶たせ、靖逆將軍フニンガ Funingga (富寧安) の軍から一隊を出してトゥルフアン Turfan に駐防させ、トゥルフアン駐防の副將軍阿喇納をガス路に出してこの道を遮断させるようにした。しかしロブザンが真実帰順するようなことがあるかも知れないので、阿喇納の軍は一時ブルンギル Bulangir (甘肅省安西県) を掃蕩し、その後の経過により青海に進軍させることにした(方略卷二二、元年十月丁卯の条、実録卷二二、二二丁裏)。

清軍の作戦は先ず西寧附近から開始された。元年十月十九日にロブザン軍は鎮海堡<sup>⑥</sup>を攻め、二十五日に至って死傷六百余を出して退却した(方略卷二二、元年十月癸酉の条、実録卷二二、二七丁表)。同時にロブザン側に加担していた多巴の囊素 Zan so<sup>④</sup>のアワンダンジン Awang danjin、Nag dban bstan bdsin (阿旺丹津) もこのとき擒えられた(前掲書)。続いて十一月には西寧の南川口に侵入してきたが、守口の兵は少なく苦戦に陥った。守備の馬友仁は申中堡<sup>⑤</sup>に拠ってこれを防ぎ、内応者が出て賊を導き入れたが、他の兵の応援で漸くこれを退けた(方略卷二二、同年十一月戊寅、実録卷一三、一丁裏)。同時に敵二千余は北川新城<sup>⑦</sup>を占拠したが、これも撃退した。一方莊浪(甘肅省莊浪県)のあたり、碁子山、茨爾溝<sup>⑦</sup>には謝勒蘇種、額勒布種等の蕃族がいて賊を助けていたが、その首長はともに生擒され、軍法にかけて処断された(方略卷二二、元

年十一月丙戌の条、実録卷二三、八丁表)。続いて北川の上白塔、下白塔両地方の蒙古回人が一部討伐され、頭目は擒えられ、他はすべて降服した(方略卷二二、元年十一月丁亥の条、実録卷一三、一〇丁表)。更に黄喜林の部隊はロブザンチャガン Lob-dzang cayan (羅卜蔵察罕)<sup>⑨</sup>の兵を攻撃し、奇嘉寺の賊、ラマ蕃人等を破り、武器馬匹牛羊を無数に得て西寧へ帰った。これによって西寧の南川、北川、西川鎮海堡等は皆掃蕩され、背後の莊浪管内で行路を阻害していた蕃族も討滅されて、西寧近辺はほぼ平いだ。

十二月に入ると、敵の兵三千余人が北方ブルンギル方面に侵入してきたが、所在の軍がこれを撃破した(方略卷二三、元年十二月辛酉の条、実録卷二四、一三丁表)。ただ西寧方面では南川口外の郭密九部が掠奪を肆にしていたが、シャクトルアラブダン Sakdor arabdan (沙克都爾阿剌卜坦)の三部は降り、他はなお横行していたので、岳鍾琪の軍がこれを討伐した(方略卷二三、元年十二月辛酉の条、実録卷一四、二二丁表、十二月癸酉の条)。

清軍の電撃的な作戦の進捗は、日和見的なタイジ等の態度を変えさせ、彼等は次々と清軍へ身を投じて来た。チャガンダンジン属下のエルケジャルグチ Erke jaryuci (厄爾克扎爾固齊)、アルダルホシムチ Aldar qosiyuci (阿勒塔爾和碩齊)、ラブム Labum (拉布木) 等三人は、ロブザン軍の看視が解けたのを機会に、一千余口を率い、貝勒セブテンジャルは青海左翼のツェリン Tsering (冊零)とその弟タイジ、バルジュル Baljur (巴勒珠爾) 等二千余口を率いて来投した(方略卷一三、元年十二月癸丑の条、実録卷一四、七丁表)。ついでラジヤン Lajab (拉察汗)の子チャガンラブダン Cagan rabdan (察罕喇卜坦)、ワンチュクラブダン Wangcuy rabdan (旺舒克喇卜坦)の二人が来投したが、ラジヤンは最初ロブザンに付き、後バルカム Bar khams (布色卜騰)、ナハンイェシハイ Nayan yesai (納罕伊什)、ロブザンチャガンの母、妻子および貝勒ツ

エリン・ドンドゥブ Tsering dondub / Tshe rin don grub (策零敦多卜) の姉等が西寧に來投し、口外に安挿された(方略卷二三、二年壬子)の條、実録卷一六、一四丁表)。また時期は少しく後になるが、チョクライナムジャル Coytai nanjal / Phyogs las nam rgyal (楚克頼納木扎爾) も、その子ツェリン・ドンドゥブおよび属下の一千余戸を率いて來投した。年羹堯は彼等をイェケウランホシヨ Yeké ulagan qosnu (伊克烏蘭和邵) に「旧に照して」居住させたが(方略卷二三、二年二月癸酉)の條、実録卷一六、三三丁表)、恐らく作戦がここまで及んでからのことであつたので、そのまま住せしめたのであろう。

① オチルハン・ダヤンの孫チョイクル Cuyin / Chos ikhor の子で、のち兩左翼後旗の祖となつた。

② 常寿は方略ではすべて常授となつてゐるが、実録、奏摺に従つてここでは常寿を用いる。このときの常寿は「駐劄西寧辦青海事務」の職稱を持っており、この後を継いだのは内閣學士オライ Orai (鄂頰) である。オライは雍正元年三月己亥にチベットに派遣されており(実録卷五、一八丁裏)、二年三月にチベットから西寧に至り、蒙古(青海ホシヨト) 事務を辦理することを命ぜられてゐるが(方略卷一三、二年三月丁亥)の條、実録卷一七、一五丁裏)、彼は当時ロブザン・ダンジンに乱にチベット貴族のコミットするのを畏れ、その工作に傾倒してゐたため(九頁参照)、数カ月後にラサを出発してゐる(Cf. p. 85)。その間、青海事務を扱つたのが達翰であり、後述の二年五月の年羹堯の青海善後事宜によれば、一等侍衛副都統達翰に、戦後も暫く留まつて辦理させることが奏請され、允されてゐる(方略卷二年五月壬戌)の條、実録卷二〇、二八丁表)。尤も達翰は雍正三年に、オライの後を繼いで正式に辦理青海事務の職に就いたらしい(新志卷二四、一丁表)。

③ 新志卷九、三丁表に鎮海城があり、「西去(西寧) 府四十里」とある

り、嘉靖元年に防守の官を置いたと言ひ、その規模を説明する。また同書卷一の西寧府輿地図のうちの西寧府全圖、西寧県圖にはともに鎮海城を見出すことができる。

④ 多巴は西寧附近の小都市で、貿易市場としてこの頃まで相當榮えていたらしい。康熙三十四年十二月丁酉の刑部尚書圖納の疏言にも「多巴は市賈の集場である」といひ、ガルタンが窺伺するのを警戒すべきことをいっている(聖祖実録卷一六九、一六丁裏)。しかし後に丹噶爾にその繁榮を奪われて消滅したようである。羽田氏の研究によると、デュアルド J. B. du Halde の中華帝國全誌には、この町が名門出身のラマ僧の管轄下にあると言ひ(羽田明「西寧と多巴」東洋史研究第一〇巻五号二六頁)、秦辺紀略では表力幹 Mogan 所部の宰僧(宗卷一)と達頼黃台吉 Dai qong taiji 所部の宰僧(一が支配してゐると伝える(前掲書二七頁)と言ふ。ここにナンソと言われるのは明かにラマ廟等の管事官を指すので、デュアルドの記述に合致するものである。メルゲンは康熙六年に塞内出口事件を起したメルゲンタイジ(聖祖実録卷二三、二九丁表、卷二四、一三三丁裏)、ダライホンタイジはダシハンの第六子ダライバートル・ドルジとすれば、或は多巴は、以前はともかく、このときは青海ホシヨトの勢力下にあり、後羽田氏の

言うごとくクンブムに布施されたものかも知れない(羽田前掲書)。

⑤ 新志卷一〇、七丁表に申中旗があり、「南去〔西寧〕郡城五十里、貴德所千総管理」とある。また同書卷一九、二丁裏には、万曆中の番人二十五族の一つとして申中旗が掲げられており、「去〔西寧〕衛治四十余里、有城郭盧室、為業戶三百、口六百有奇」とあるから、明代から城廓をなしていたことは明かである。

⑥ 新志卷九、三丁裏に永安城があり、その位置は「去〔西寧〕府治七十里」とあり、「南距旧城五里、人謂之新城」とあるから、これが北川新城に当るであろう。同書輿地図の西寧府全図、西寧県図等に、北川〔城〕があるから、この附近にあったのであろう。尤も全図の方には大通河畔に永安城があるが、これは同書卷九、一一丁表に、「永安城、西北大通〔衛〕治二百一十里」とあるもので、別の城としなければならぬ。

⑦ 十三排図に、西寧の東北に当り碁子山がある。茨爾溝は不明。

⑧ 新志卷九、一〇丁裏に大通衛管轄下の白塔城があり、「北去〔西寧〕府治一百二十里、南去大通城一百二十里、旧青海地」とあるのがそれであろう。但し、ここに北、南とあるのは南、北の誤であろう。同書の西寧府全図には大通衛白塔と記されている。

⑨ グンハンの第二子オンボ *Ombo* (Dbon po) の曾孫で、後降り、南左翼末旗の祖となった。

⑩ 奇嘉寺の位置は明かでない。この戦闘の報告で年號堯は、「厄魯特番賊、往来劫奪新城堡等处」と書き出しており、この新城を北川新城(二一註⑥参照)とすれば、この近傍にあったことになる。新志卷一

四三

五、一〇丁裏に、大通衛管下の番寺として祁家寺があり、「在城西北八里」と記されているから、或はこれがそれに当るのかも知れない。

⑪ 新志卷一九、一三丁裏に、西寧県に属する番族として、上各密族四部、下各密族五部が挙げられており、その位置は殆どが西寧の西南方面であるから、これが南川口外の郭密族九部であろう。

⑫ 辛酉は誤で、癸酉が正しい。

⑬ ツェリンとバルジュルはオチルハン・ダヤンの末子メルゲンノヤン *Mergen noyan* の子であるが、ツェリンは康熙五十年に輔国公に封ぜられ、後に北前旗の祖となった(袁伝卷八六、八丁表、遊牧記卷一二)。  
⑭ ラジャブはグンハンの子イルドゥチの孫メルゲンノヤン *Mergen noyan* の子。後赦されて南左翼中旗の祖となった。

⑮ ジクジヤブはグンハンの第二子オンボの孫ロブザンダルジャ *Lob-dzang darja* (Bto bzah dar rgyas) の子。のち南右翼末旗の祖となった。

⑯ ツェリンドンドゥブについては次註⑰参照。

⑰ ツェリンドンドゥブはグンハンの第七子ホルムシ *Gormuši* の孫噶爾車木伯勒の子。チョクライナムジャルは噶爾車木伯勒の妻である。清軍入寇のときには、既に亡っていた夫に代って、彼女は糧食を献上し、康熙六十一年に母子ともに入朝し、雍正元年にツェリンドンドゥブは貝勒に封ぜられた。

⑱ イェケウランホンヨは十三排図において、青海湖の北に伊克烏蘭和紹必拉とある河を指すのであろう。明かに台吉策凌敦多布と標された天幕がある。

ところでこの反乱の一つの特徴は、青海貴族のみでなく、ラマが多数戦闘に参加していたことである。ラマの戦争に対する態度は、一般には中立を守り、積極的姿勢は寧ろ休戦、調停の際に発揮される。平和を旨とする仏教の教による限り、この態度は常に是認され、またそのような活動によって、かなりの場合ラマ教團では平和が維持されてきたのである。しかしこの反乱では、彼等は平和的であるべき姿勢を反乱への参加に転換していた。雍正帝は雍正二年正月に、理藩院を通じて中外のラマに諭し、清朝が第五代、第七代ダライのために力を尽して援護したことを述べ、

仏教復興、如此隆恩、喇嘛並不感激、反助悖逆之人、凶惡已極、於仏門之教、尚可謂遵受奉行者乎。

と言って、ラマ等を責めている（方略卷一三、二年正月甲申の条、実録卷一五、四丁表）。奇嘉寺の賊、ラマについては既に触れたが、二三の例を更にここに述べよう。

第一はクンプムのケンボノムンハン *Mikhan po nomun qan*（堪布諾們汗）の場合である。彼はチャガンダンジンの姪で、ロブザンダンジンを煽動し、ラマを清軍に向わせた。大軍が進出して来たのを見て恐れ、雍正元年十二月に所屬を率いて降服したが、年羹堯はその罪を許すべからざるものとして、到日直に処断した（方略卷二三、元年十二月戊午の条、実録卷一四、一〇丁表）。

第二は反逆ラマの最大の拠点ゴンルン寺 *Dgon kluns* <sup>①</sup>（郭隆寺）の場合である。ゴンルンにはチャンジャホトクトが坐牀しており、ラマでロブザンやアラブダンオンボと親しいものが多かった（奏摺上、四七頁）。雍正二年正月にゴンルンのラマは軍事教練を始めたために、年羹堯はそれを禁止したが、ラマ等は東山一帯の蕃人を集め、正月十一日を期して戦闘を開始した。年羹堯は岳鍾琪を討伐に向わせたが、十二日には哈喇直溝で戦い、翌十三日にはゴンルン寺に到着した。敵は寺院の内外で抵抗したが、岳鍾琪はゴンルン寺を焼払い、六千余人を殺した。年羹堯の口吻を藉りれば、これは三藩の

乱以来の最大の戦闘であったのである。チャンジャは逸早く大通河の西の雑隆に逃れていたが、ダクバホトクト Dajba gultustu (達克瑪胡土克圖) は擒えられて斬に処せられた(奏摺上、五三頁、方略卷一三、二年正月甲午の条、実録卷一五、九丁裏)。チャンジャもその後、清軍に擒えられたらしく、九月三日に省城(陝西省城「西安?」)に到り、更に同月二十日には北京へ送られた(奏摺上、四三頁)。このチャンジャは第二代の活仏ロルペードルジェ Rol pahi rdo rje に相違なく、橋本氏のいう、康熙五十六年に生れ、八歳で京師に至って、非常な歓迎を受けたという彼の事蹟に一致するものである(橋本光宝「蒙古の喇嘛教」一五一頁)。

第三は石門寺のラマの場合である。年羹堯は涼莊道の蔣洞の報により、石門寺のラマ、ナンソニサムテン Nain so Bsam stan (囊素山丹) 所屬の多卜蔵、瑪嘉の諸部落が偽って清軍に降り、謝勒蘇族、額爾布族の逃人等とともに石門寺に入って往来を劫掠しているのを知り、蔣洞を遣してこれを討たせた。蔣洞は五路の兵を発し、ラマ、蕃賊六百人を撃殺し、寺内から多くの武器、甲冑等を搜獲した後、その寺を焼払った(方略卷一三、二年二月丁卯の条、実録卷一六、二八丁表)。ただ遺憾なことにはこの寺院の所在は明かでないのである。

第四はゴマン寺 Sgo man (広惠寺) の場合であるが、これの焚燒の事実は新志によって雍正元年であったことが分るだけで、詳細は不明である。

第五はラマ、ジャムサンケンボ Rgyal mtshan mkhan po (嘉木燦堪布) の場合である。これは青海西方の作戦の終った後であるが、雍正二年三月三日に、年羹堯の部下の達爾嘉は副將の紀成斌とロブザンの属人を掃蕩するうちに、ジャムサンケンボラマが布代山に匿れ、チベットに逃亡する恐れがあることを探知した。そこでタイジのジンバ Jimba < Shyin pa (済木巴) に兵を授け、問道伝いにラサへの道を遮断させ、本隊が索羅穆まで追撃してジャムサンとチュイジャムン Cuyi jamso < Chos rgya mtsho (吹扎木素) 二人を斬った(方略卷一三、二年三月癸卯の条、実録卷一七、二七丁表)。ただジャムサンケンボとロブザンとの関係は右の文献では明かでないが、年羹堯によると、彼は為人極めて詭詐で、力をつくし

てロブザンの用をなし、「内地の情報を探聴し、賊人の口糧を接済したのである」という(奏摺上、四二頁)。

清朝は反乱の青海タイジに対しては必ずしも敵刑で望んだわけではない。前にロブザンに附いたものでも、「脅従」させられたものとして、作戦中に来帰したものには寛大な処置をとった。しかしラマに関して、苛酷なまでにその罪を追求し、極刑に処した。社会の指導的立場にあり、平和を称える仏僧でありながら、敵側に加担し、戦闘に参加したことが許せなかったばかりでない。年羹堯の言によれば、祁家寺、ゴマン寺などは皆民婦を掠奪してきて内に入れ、ラマの櫃の中には婦人の衣鞋が数え切れない程あったという(奏摺上、四六頁)。その情落ぶりが亦清朝側の怒を招いたのである。

① ゴンロン寺は大通衛の南にあるゴマン寺(広惠寺)より東南の所にあり。新志卷一五、四丁表には、佑寧寺の項に

在〔西寧〕城東北一百三十里、原名格隆寺、雍正元年隨青海遊謀、被官兵焚毀、雍正十年奉旨重建。

とあるが、格隆寺はゴンロンをそのまま写したもので、佑寧寺はその漢名である。新志の西寧県図には西寧の東北に佑寧寺が存在する。この寺院のチベット名はゴンロンジヤムバリン Dgon klunz byams pa glin が正しく、一六〇四年に創設されてゐる。詳細はワイリー氏 Turrell V. Wylie の GT. p. 109, p. 196, fn. 760 を参照された。

② 新志卷一五、一〇丁表には、

在〔大通衛〕城東七十里、原名郭莽寺、雍正元年、隨青海遊謀、被官兵焚毀、雍正十年、奉旨重建、賜額広惠寺、勅賜碑文。

とあり、その漢名の由来を説明している。郭莽寺と呼ばれるのは、この寺院の学問がゴマンの系統を引くからし。十三排図では、大通衛の南方に郭莽珠克特亭とあるのがそれに当る。珠克特亭は満洲語の jukchen (廟) を写したものである。チベット語による正式の名はガムンダムチャヨリン Dgah lan dam chos glin であるが、チベット文献による詳細は GT. p. 109, p. 195, fn. 757 を参照された。

③ 布代山は青海の東南ブルハンブダ山 Burgan buta の略称であろうか。

④ 索羅穆は、実録では梭羅木と書かれており、オドントラ Odun tala を指す。方略卷八、康熙五十九年十一月辛巳の条(または聖祖実録卷二九〇、四丁裏)に、康熙帝が黄河の河源を論じて、

黄河之源、出西寧外庫爾坤山之東、衆泉湊散、不可勝數、望之標如列星、蒙古謂之敖敦塔拉、西番謂之索羅木、中華謂之星宿海、是為河源。

と言っているが、敖敦塔拉は Odun tala で誤ない。索羅木は難解であるが、Misho hgram とすれば「湖岸地帯」を意味するであろう。多くの湖のうちで最も大きいものはジャリンノール Jareng nayur (札陵海)、オリンノール Oreng nayur (鄂陵海) だ、これらの水を集めて黄河の源流は形作られている。この両湖のチベット名は Mtscho slva rabs (ria) / Mtscho sro rens (ria) である (GT. p. 117、同文志卷一六、一三丁表、一四丁裏)。十三排図ではジャリンは西、オリンは東に置いているが、中国の最近の地図は皆、ジャリンを東、オリンを西に置いている。何れが正しいのであろうか。

⑤ ヘテック氏は、「ロブザンダンジンの仲間を拉擄する過程で、中国



の騎兵は屢々チベットに入り、この國の奥深く進入した」とし、その例として、世宗実錄卷一七、二七丁表にあり、「Mu-tsan m'kan-po bla-ma y Taiji Chi-nu-pa が違藩によりて追跡、擒獲、処刑され

た」というが、原文の読み誤りである。前者は來木燦堪布喇嘛の語頭音を落しており、後者の濟木巴台吉は違藩指揮下のタイジであつて、ロブザン側の人間ではない。(Cf. p. 84, fn. 2)。

#### 四

さて清軍は青海東方の掃蕩をほぼ終つた後、更に作戦を青海西方ロブザンダンジンの根拠地へと向けていった。

雍正二年二月八日、岳鍾琪の軍は西寧を出、兵を三路に分けて進撃を開始した。南路を進んだ岳鍾琪の本隊はイエケハイルギ河 Yake gayirgi xool (伊克哈爾吉)<sup>①</sup> 地方に至り、ハイルギ山 Gayirgi ayula (哈爾吉山)<sup>②</sup> 中でアラブダンオンボを擒え、黃喜林の一隊はバルジュールアラブダン Baljur arabdan (巴爾珠爾阿喇布坦) とその叔父イエケラブダン Yeke rabdan (伊克喇布坦) を擒えた(実錄卷一六、二二丁裏)。続いて同月十四日に岳鍾琪の軍はシルガロサ Sirya layusa (西爾哈羅色)<sup>③</sup> に至り、叛賊チュイラクノムチがテンチンチャガンハダ(天城察罕哈達)<sup>④</sup> にいるのを襲い、人畜多数を擒獲した。十三排図にはシルガ河、ロサ河南に台吉吹拉克諾穆齊の天幕を置いているから、このあたりが彼の牧地であつたのであろう。チュイラクは十四日の夜にガス方面に逃走したが、その部下のドラルジャイサン Durai jaysang (都喇勒宰桑) とダシドンドゥッパ Daši donduh (札什敦多卜) の母はボンソクワンジャルに擒えられた。同時にロブザンダンジンがなお彼の牧地にいることを確め、十九日大軍は直にその方面に向つた(方略卷一三、二年二月丙寅の条、実錄卷一六、二七丁表)。ロブザンの牧地は青海の西辺ダブスンノール Dabusun nayur のあたりであり、当時の根拠地はその近くのエムネブルンギル Emüne bulanggir (額穆訥布隆吉爾)<sup>⑤</sup> であつた。ロブザンは早くも西方へ退却しつゝあつたので、岳鍾琪は分兵一千を以てツアイダム北路を西進させ、ガス路を遮断した。一方彼自身はツアイダム南路によつて賊軍を追跡した。二月二十日に賊がウランムフル Ulağan nuqur (烏蘭穆和爾)<sup>⑥</sup> に逃げ、続いてツァ

イダムに至ったので、先鋒の兵一千を以て追ひ、ロブザンダンジンの母アルタイハトゥン Altai qatun (阿爾泰略屯) とその妹婿ゲレクジノン Gelek (∧Dge legs) jinnong (格勒克濟農) / ツァンバジャブ Tsangpajab ∧Gtsan pa skyabs (藏巴扎布) を擒獲した。二十二日には軍はツァイダムに至り、分隊を烏蘭白克<sup>⑧</sup>に向わせ、チュイラクノムチ、ダシドンドゥブを擒え、乱に加わった七タイジをすべて生擒し終った(方略卷二三、二年三月癸未の条、実録卷一七、九丁表)。七タイジと言うのは、ロブザンを除いた首惡のチュイラクノムチ、アラブダンオンボ、ツァンバジャブ、これに与したバルジュルアラブダン、ダシドンドゥブ、ゲレクジノン、アラブダンバスタイ Arabdan bastai (阿喇布坦巴蘇泰) である(表伝卷八一、二八丁裏)。ロブザンはこの頃は、従うものは二百余人に過ぎなかったが、巧に清軍の追撃を免れてジュンガルに逃れ去った<sup>⑩</sup>。なお一部のものの掃蕩戦は方々で行われたが、それについては省略する。

この青海西方の作戦は、開始されたのが二月八日であり、同月二十二日に終了したのであるから、極めて成功裡に終始したものと見てよい。清軍の電撃戦の榮光に比べて、ロブザン側は余りにも無残な敗北であった。同じ青海人のスンバケンは咏嘆的な口調で、次のごとく文章を残している(青海史四四三頁、AK. P. 49)。

丑の年(一七二二、康熙六十年辛丑)に〔彼等は青海に〕歸り、寅の年(一七二三、康熙六十一年壬寅)に集会をなしたると  
き、

前の誓と内なる掟を廃めるか否か、〔彼等の〕意見は一致せず。

癸卯の年(一七二三、雍正元年)、シナの天子雍正 Yoh shi 位に即きたる年に、  
内外の戦のために〔青海の〕軍は集りたるを、

我(スンバ)はチベットのウイに行く道にて見たり。

その後、内に戦いながら(タイジ同志の戦)、シナの若干の城塞にて戦いたるも、  
戦の仕方を知らずして、子供の遊べる有様に似たり。

そのときシナの二人の將軍(年と岳)は大軍もて、

この方面の支配に力を注ぎ、戦を準備せり。

鶻に、小鳥の群の逐わるるがごとく「彼等の」散りたるとき、

モンゴル軍の首領(ロブザンダンジン)は北方に逃れ、兵も他の地へ散亡せり。

なお肝心のチベット本土のこの乱に対する反応であるが、ラサ駐在のオライ(二一註②参照)は直にカンチンネー Khan chen nas (康濟爾)をガリー Mnah ris から召喚し、ポラネー Pho lha nas (頗羅爾)を前線に出動させることとした。ポラネーは五百の兵を率い、ペンネル Phan yul を出発し、途中兵を加えてナチュカ Nag chu kha に行き、その地方を警戒した。また第七代ダライはガンデンチパ Dgah Idan khri pa のペンデンタクパ Dpal Idan grags pa を青海に遣し、宗教的影響力で、タイジ等がロブザンに味方するのを防いだというが、その具体的な事実は明かでない。とにかくチベット側は乱による内部的な影響を殆ど受けることなく、この時期を過したのである。当時のラサ政府およびポラネーの動向についてはペテック氏が述べているから(Cf. pp. 82-84)、詳しくはそれについて見られたい。

- ① 十三排図によれば、青海の東北に伊克哈爾吉必拉があり、この地方と見て誤ない。
- ② 十三排図によれば、伊克哈爾吉必拉の北に哈爾吉阿林がある。
- ③ シルガロサはシルガ河 Shrya yool とロサ河 Layusa yool の流域の辺りを指すのであろう。十三排図によれば青海の西北に西爾噶必拉と羅色必拉なる小河川がある。尤も同文志卷二一、八丁表によればシルガロサノール Shrya layusa nayur (錫爾哈羅色渾爾)なる湖があるが、恐らくこの両河の側にあったもので、これが本文のシルガロサであろう。
- ④ 十三排図にある、シルガ河、ロサ河の南方の天沁察罕哈達であろう。テンチンの意味は不明であるが、チャガンハダ Cayan gada は「白ト(布)を正しいものと見なす。
- ⑤ ダブスンノールは、十三排図では、青海の西辺に達布孫渾爾とある。彼の牧地については詳しくは別稿で再説したい。
- ⑥ エムネブルギルは十三排図に青海の西に布隆吉爾必拉とある川である。
- ⑦ ツァイダム南路に沿った地点と思われるが、位置不明である。
- ⑧ 方略の原文には蔵巴濟扎布とあるが、同書卷一四、二年閏四月癸未の条には蔵巴扎卜とあり、対応する実録卷一七、九丁裏の文には蔵巴吉查とあり、同書卷一九、八丁裏には蔵巴扎布とある。故に蔵巴扎ト(布)を正しいものと見なす。

⑨ 位置不明であるが、或はウランブ拉克 Ulaian butay であろうか。  
表伝は蔵巴扎木とするが、木はトの誤とみなす。

⑩ ロブザンダンジンは乾隆二〇年（一七五五）に、ジュンガル討伐の行われたとき、擒えられて北京に送られた。しかし特に赦されて京師に任せしめられ、二人の子は討伐の噂を聞くと直に清軍を迎えた功により、内蒙古正黄旗に附けられ、賞給された（高宗実録卷四八九、六丁裏、同卷四九一、四丁裏、一丁裏、一七丁裏、一八丁裏）。ロブザンの二人の子の名は、Barang（巴朗）、チャガン（Ebageン Cayan obügen（察罕額布根）である（要略卷二一、一八丁表、同文志卷一七、一丁裏）。

## 五

さて次に反乱の原因について考えてみよう。前に述べたロブザンダンジンの従軍入蔵の功に対する報賞が薄かったことは、既にその原因の一つに数えられるかも知れない。しかし中国側の記録では次のような事実が更に判明する。

雍正帝は元年の七月に事情調査のため、侍郎の常寿をロブザンダンジンのもとに派遣した。七月二十二日に彼はシャラト（Šalatu（沙拉圖））に行き、ロブザンの駐牧地に至った。そのときロブザンは次のように言った。

チャガンダンジンとエルデニエルケトクトネーは招地（チベット）に抛らんと欲し、詭言を以て、「ロブザンがジュンガルに使者を送り、ツェワンアラブダンとともに背叛しようとしている」と言い、私を讒害しようとした。この故に諸タイジは服せず、会盟して兵を起したのである。

また次の言を付け加えた。

チャガンダンジンは甚だ悪党で、数日のうちに黄河を渡り、勝敗を決しようとしている。情勢かくのごとくであれば、

乾隆二十七年に青海のジャサク等は、ロブザンに旧牧地を賜わらんことを請うたが、その願は許され、シラゴール（Sira yool（西喇鄂勒）、シラガルチン河（Sira yalain yool（西爾噶爾金）の東方の広い土地を与えられた（要略卷一三、二四丁表。シラゴールは敦煌の側を通る河で、別名党河と呼ばれ、その上流がシラガルチン河になっている（十三排圖）。ロブザンの簡潔な伝記は、ベテック氏が既に述べているが（Notes, p. 288）、その長子をバヤン（Bayan）としているのは、巴ランの誤であろう。またロブザンが最初内蒙に住せしめられたというのは、中国文献のうちには見えないことである。

勢として和好に向うことは難しい。

一方チャガンダンジンは常寿に言った。

ロブザンダンジンは兵を起して、「左翼の」エルデニエルケトクトネーを「中国の」内地に逐い、諸タイジを脅迫して兵をバルトロガイ Bar(s) toloyai (巴爾托羅海) に挙げた。その意図するところは、西招(チベット)、青海の地を独占支配しようとするもので、その兵数は一万二三千に過ぎず、その党は大むね脅従させられた者である。もし「彼が」黄河を渡ってくれば、我は力を尽してこれを拒ぐつもりである。

また青海モンゴルの諸部の人の言は、前にも触れたが、

ロブザンダンジンは諸部を脅迫し、自らをダライホンタイジと呼ばせ、その他のタイジは皆もとの号に返らせ、王、貝勒、貝子、公等の封号を称してはならないとしている。

と言ひ、常寿は以上を総括して、

その意図するところは、先ずエルデニエルケトクトネー(左翼)を滅し、次いでチャガンダンジン(右翼)を逐い、その後諸タイジを集め、彼にハン号を賜らんことを朝廷に奏請し、招地に駐割し、青海を遙制せんとするものである。と断じ、ロブザンの反乱の意図あることは誤ないものとしている(方略卷二二、元年八月庚午の条、実録卷一〇、二四丁表)。

この証言のうち第一のロブザンの言は極めて曖昧であり、また事実在即していない。と言うのは当時チャガンが最初にロブザンを討とうとした形跡は何処にも見えず、誣言と言うより他はない。第二のチャガンの言は最も真実に近い。ロブザンがチベット、青海を制覇しようとしたことは、常寿の総括にもそのまま表れているが、「ハン号を求め、チベットに駐割し、青海を遙制せんとする」ことは、そのままホシヨト部長となり、王としてチベットに君臨することで、死んだラザンハンに代って、自らがチベット、青海の支配者となることを希求したものに他ならない。年幾幾も雍正元年四月の頃に、「ロブザンダンジンが自らを揣らずして、チベット王たらんことを望んでいる」といっている(奏摺上巻三頁)。既にペテ

ック氏は (CT. p. 82)。

彼はホシヨトを統一することと、自らが代表となってグシハンの帝国を再生することを夢見ていた。

と言ひ、また (Notes, p. 289) -

反乱の原因の一つは、ロブザンダンジンが何らかの形で、チベット政府の首長の地位に置かれたいという満されぬ野望の故にであった。

と言う。中国側の史料もつまるところはペテック氏のこの結論を証明するものである。しかしチベット側の史料には、更にこの間の事情を明かにするものがあるので、ついでにそれを紹介しておこう。

スンバケンボには次のような記述がある (青海史四四三頁、AK. p. 49)。

この時期 (一七一一一七二〇の頃) における、青海の人々につぎての若干の物語を述べれば次のごとくなり。

ポタラにおける大饗宴のときに、

中国の大官は中央の列にて鄭重に扱われ、

我等青海人たちのみは、

後の列にて、食物の配りは匆々になされたり。

第二にタグツェ・デバ Stag rtse Sde pa の生命を乞いたれど、

聴かれずして願は空しく消されたり。

第三に我等はリタンより、

今に至るまでダライラマ貌下を、

獅子座に即けるべく力を尽し、事を成就したれども、

その事の必要なるときには我等を大なりとなし、他のとき (のち) にはこれを低く見なせり。

更に我等がひそかなる見解によれば、

「昔よりグシハンの系統のもの次々に、

チベット王位に即きたるごとく、今もまた、

かくあるべきに、ツァンの相たるカンチンネー、

デシの位に就くなどの多くのことのため、

我等は恥辱によりて汗もてその顔を洗い、

心臓に刺の突きささりたるがごとし。

怨を押えて、雪有国(チベット)の仏の御許に、

中国に対し反乱を起すことを一致して誓いたり。」と。

我(スンバ)は青海に帰りたる時、皆にこのことの述べられたるを聞けり。

されどシナ、チベットの何れと戦うとも、

特にシナの帝国は「青海人」そこに住める故に、

シナと戦うは、「魔神は東、身の代は西」<sup>④</sup> Hdre gar nub glind の諺(ことわざ)。

ここには青海タイジ等の不満が明瞭に表れているが少しく吟味を進めてみよう。まず第一に、ポタラの饗宴で彼等が不当に差別待遇を受けたことであるが、第七代ダライのラサ入りは清軍のイニシャティヴで行われ、青海タイジ等はそれに追従した形であったから、席の順位は問題でない。恐らく宴会のときの取扱いが中国の大官には鄭重になされ、彼等には追末になされたということが不満の原因となったのであろう。生れながらのラマ教徒であり、ダライの熱心な檀越を以て任じている彼等としては、このような冷い待遇は不愉快の上もないことであつたに相違ない。しかしチベット人がラザンハンの庄政によってホシヨト族に好感を持っていなかったのは事実で、それを作戦の主体である清軍と同様に扱うことは、

要求する方が無理であろう。第二のタグツェバの助命の問題については、ロブザン側が積極的に動いたという事実は明かでないが、一七二〇年にチベット仮政府が作られたとき、ロブザンは青海ホシヨトを代表して内閣の一人に数えられており、或は彼とタグツェバの間に隠れた何等かの取引があったのかも知れない。タグツェバは確にジュンガル軍のラサ侵入のときの傀儡首相であり、清軍は事実彼を極刑に処したが、彼は清軍入蔵のときは、ラサ郊外までこれを出迎え（C.T. p. 22）、その助命にはボラネー等も奔走している。その身分からしても清軍が彼に対して取った処置は少なくとも青海タイジ等には冷酷無残に見えたのであろう。第三は確に第七代ダライを早くから承認したのは青海タイジ等であり、彼等がその保護にも非常な尽力をしたのは既述のとおりである。

青海人の考え方として、グシハンの系統のものがラザンハンの後を継ぐべきはずなのに、それがネグレクトされ、チベット貴族のカンチンネーが実権を握ったのは、彼等として恥辱の上でもないことだというのが、ここに当時の青海ホシヨト等の深刻な不満の感情が明白に表れている。その頃ホシヨト部の最高の地位にいたロブザンダンはラザンの系統が壊滅したとき、清朝に協力し、チベットの秩序恢復に力を致した故に大に期待するところがあったのであろう。ところが案に相違してホシヨト系の王位継承は認められず、チベット貴族のカンチンネーがデンとされたのは、驚に油揚をさらわれたと同様不本意の上もないことであった。年羹堯の言によれば、カンチンネーや同じチベット貴族の有力者ガポエバ Na phod pa (阿爾布巴) などとはもとよりロブザンがチベット王になることを願わなかつたという(奏摺上、五一頁)。ロブザンはこれを知ってか、知らないでか康熙帝の死、雍正帝の即位と続いた政治的空白のときが、彼を遂に反乱へと踏切らせたのである。

- ① シャラトウの位置は明かでないが、十三排図において、青海の南方に沙拉図布喀西と記される地点がそれかも知れない。モンゴル語でシャラトウは、「水草のない所」と言う(同文志卷一四、一八丁裏)。常

寿はシャラトウからロブザンの牧地に至っており、その牧地は青海の西ダブスンノールの近辺であるから、沙拉図布喀西からは西北に当る。つまり常寿は青海の南辺を通り、その目的地へ到達したのである。



② 十三排図によれば、青海の東、チャガントロガイの北に巴爾淖爾 Bar(s) nayur があり、或はこの附近にバルトロガイはあったのかも知れない。

③ その後、常寿は工作の失敗によって失脚した。事情は次のごとくである。彼は雍正元年十一月九日に西寧を離れて千総の馬超羣を連れてバヤンブラク Bayan bulak (巴顏布拉克) に行けるロブザンのもとへ再び至った。このとき彼が何を意図していたのかは明かでないが、ロブザンとチャガントロガイにおいて会議をすることは先に約束されていた。ところが常寿が夕暮に和爾(十三排図にある青海南辺の和爾必拉の附近であろう)に至ったとき、ロブザン軍二三千が忽ち常寿を襲撃し輜重を掠奪した。年羹堯の上奏によれば、それは十月十七日のことであった(奏摺上、六一頁)。そして彼はハンボ廟 Mihan po sume (堪布廟) に軟禁された。事の次第は逃げ帰った馬超羣によって報告されたのである(方略卷一三、二年正月丁丑の条、実録卷一三、六丁裏)。ところが間もなく十二月十三日になってロブザンは常寿を送り帰して来、奏章一函を呈上した。雍正帝は、常寿がロブザンの叛情を奏聞せず、一切の軍務は皆年羹堯に押付け、勝手に西寧を出て騒々し

六

以上のごとくこの反乱は時間的には極めて短時日の間に鎮圧されてしまった。地域的な範囲を見ても、東は西寧周辺であり、南はオドンタラ、西はツアイダム、北はブルンギル(安西)で、戦闘区域は青海省の東辺に限られている。しかしその結果は、青海ホショトの従来在り方に非常な変動を与えるものであった。

年羹堯は戦闘が終ると、五月十一日に青海善後事宜十三条と禁約青海十二事を上奏した。雍正帝は五月のうちに総理事務王大臣等にこの上奏文を検討させ、その殆どを大して修正することなく実施させた(奏摺下八六三頁、方略卷一四、二年五

く青海に行き、部下が戦死しているにも拘らず、釈放されると厚顔にも生還してきたとし、「湖職巴に甚し」と言い西安に送って監禁することとした(前掲書、実録卷一五、二十一頁)。而して帝はロブザンのこのことあるのを予想していたと言ひ、要するにロブザンが甘言を以て親善を願ひ、我が兵の作戦を阻滞せしめるものとし、年羹堯に警告を与えている(方略卷一三、二年正月戊寅の条、実録卷一五、三十三頁)。常寿がロブザンの反情を奏聞しなかったと言っているのは誤であるが、或は年羹堯の誣言がここには表れているのかも知れない。常寿がその後如何に処置されたかは明かでないが、政治的に失脚したことは疑ない。

④ 楊氏によればこの諺は、

Hdre gar sgohi, phyogs su gnas pa la/gjud nub sgor g'ton  
ba don re chun/

魔神が東の門に在るに、「それを逐払うがために」身の代金を西の門に置くは意義少し。

の略で、焦点の外れた行為の無意味さを述べたものといふ(AK. P. 93, fn. 286)。

月壬戌の条、実録卷二〇、二六丁裏)。今そのうち主なものを取上げ、その後の青海の土地、人民が如何ように扱われたかを考えてみよう。

第一に行われたのは、青海諸タイジに対する賞罰である。先ず貝勒セブテンジャルは、ロブザンが内地(西寧近辺)を犯したとき、逸早くそのことを清朝官憲に告げ、賊が西川、南川に侵入したときも、賊に加わることなく所部を率いて来降した。故に彼は郡王に晉封された(前掲書)。タイジ・ガルダンダイチン Galdan dayicing (噶爾丹岱青)<sup>①</sup>もまた、終始賊に味方せず、且つボンソクワンジャルとともにチュイラクノムチを破り、賊を大破する端緒を開いた。故に固山貝子に封ぜられた。同様に固く自ら守って反乱に与しなかったジュンガル系のアラブダン Arabdan (Arabdan) (阿喇布坦)<sup>②</sup>は輔国公に封ぜられた(前掲書)。またトルゴートタイジのノヤンゲロン Noyan gelong (ノヤンゲロン) (阿喇布坦) はマとなり、岳鍾琪に協力し、ボンソクワンジャルは先には賊に従ったが、のち悔いて降服を願出たので、投降した公ツェリンノルブ Tsering norbu (策凌諾爾布) とともに前の封爵をそのまま保持することを許された。

輔国公ロブザンチャガン、タイジ・ジクジジャブは降服してきたが、前に貝子アラブダン、バルジュールアラブダンとともに内地を攪乱しているので、爵を奪って民となし、貝子ラジャブも降服してきたが、先に賊を屢々助けているので鎮国公に降等した。ツェリンドンドップも後にはロブザンの党を捕えるなどの功はあったが最初はそれに与していたため、同様な意味で固山貝子に降等した(前掲書)。青海タイジ等の賞罰などは大して歴史の意味を持たないように見えるが、実はこのときの封爵の昇降が、その後の彼等の青海における家格を殆ど決定したことを注意したい。

第二は青海の諸部落の牧地を分割してその領域を明かにし、旗制を布いたことである。即ち百戸を一佐領 Sunu とし、百戸に満たないものは半佐領とし、数個の佐領を以て旗 Qosiyun を編成し、そのタイジにはすべしジャサク Jasax (札薩克、旗長) を授けた。またその兄弟のうちから協理台吉 Tusalayci を選び、旗 Qosiyun nu daruya 一協領 Qosiyun nu ded daruya 一参領 Jalan janggi を設けさせ、また佐領 Sunun janggi 一佐領 Sunun janggi 一驍騎校

Orolan Kugekci、四領催 Kugekci を附けさせた。但し一旗で十佐領以上あるものは、副協領一、佐領二、或は參領一を増設させた。また盟については、毎年の会盟には、その「老成恭順」なる者を選んで盟長とし、勝手にタイジ等が推して事を滋くすることのないようにしたというから(前掲書)、この盟長は会盟のためであって、内蒙古の制度における盟長 Ciyuljan nu daruga とは意味が異なっているようである。事実、青海における盟 Ciyuljan や盟公署は何れの書にも見えていない。後の会典類等を見ると、青海の全旗は青海弁事大臣の管轄下にある。年羹堯の奏言には一等侍衛副都統の達鼐を暫く留めて弁理せんことを請うているから、その当時は達鼐が一時これらの旗を監督していたのであろう(二一註②参照)。

これと同時に、輪班朝貢のことも制度として定められた。即ち青海の王、貝勒等を三班に分け、三年に一回入貢し、九年で一周年する。また内地との交易は、四時西寧辺外のナラサラ山 *Nara (n) sara (n) dabaga* (那喇薩喇山、日月山) で行うこととした(前掲書、方略卷一五、雍正三年四月丙申の条、実録卷三一、三四丁表)。

なお青海にはホシヨト以外のオイラート系、ハルハ系等の部落が若干あったが、それらは従来ホシヨトの支配を受けていた。もともと掠奪されて青海に連行されたのではなく、また今次の乱に敵に与せず、清軍を助けたものもあったので、ホシヨトに属することを願わないものは皆独立させ、旗を編成させることとした。年羹堯の言うごとく、これは「青海の勢を分つ」もので(前掲書)、いわば伝統的な分割統治であり、多分に政策的な意味合の処置であった。

このような処置によって青海には二十九旗が確立したが、その各旗の牧地と系統については別稿で述べよう。

第三は青海東辺の西蕃人を内地の管轄下に入れたことである。即ち陝西所屬の甘州、涼州、河州、莊浪、西寧、四川所屬の松潘、打箭爐、里塘 *Li than*、巴塘 *Ba than*、雲南所屬の中甸(麗江近傍)には皆西蕃人が住んでいたが、従来或はラマの耕種者となり、或は青海オイラートの属人となって租税を納めてこれに服従していた。そこでこの際帰順してきた西蕃人を、衙門を設置して治めることとし、蕃人の頭目には土司千百戸、土司巡檢等の職を授けて、近くの道庁、衛所

の管轄下に置くことにした。結局ラマ或は青海タイジに服属していた土着の西蕃人を従来の彼等の支配から引離し、清朝の直接支配下に入れたのである（前掲書）。

同時に陝西の辺境は特に防備を強固にした。辺外から黄河を渡って中国に入るのには、河州、西寧、蘭州、中衛、寧夏、榆林、莊浪、甘州等の地点があるが、その周辺は水草が豊かで、遊牧に適している。今まではこれを捨てて守らず、モンゴル等が大草灘 *Sira tala* に抛り、常寧湖<sup>⑤</sup>を牧廠として自由に往来しても阻滞するところがなかった。そこで西寧北川辺外の下白塔の所、バルトロガイから扁都口<sup>⑥</sup>にかけて辺境を築き、城堡を設けて、西蕃人が住していた地区を皆内地に編入した。従来西寧の南北の地帯は西蕃人、青海タイジ等の農牧地が多く、清朝の勢力は必ずしも充分に浸透していなかったのであるが、ここにこの地域のより、積極的な直接支配の意志を清朝は押出したのである。また肅州の西のトーライ河 *Taulai yool* (洮資河)、常瑪爾、オドンタラ *Odun tala* (鄂敦塔拉)<sup>⑦</sup>の方面は肥沃の地であるので、民を募って耕種させることにした。なお寧夏方面ではアラシャン *Alaşan* (阿拉善) が險要の地であるが、グシハンの系統のもの、特に額駙アボー *Aboo* (阿宝)<sup>⑧</sup>等はもとは皆山後(山の西)にいたのが、今は山前(山の東)に移っている。そこでアボーに敵戒して山後に帰らせるようにして、山前の營盤水、長流水等<sup>⑨</sup>の所は皆内地に編入した(前掲書)。即ち西北辺境の防衛線はこの乱を契機として一段と前進したのである。

第四は対ラマ政策である。前に述べたごとく、この乱には青海のラマの参加するものが非常に多かった。ラマ寺院には数千から五六百までのラマがおり、蕃民はラマに租税を納めているものもあり、ラマは武器、甲冑等を蓄えて戦にそなえていた。従って寺院はこれら反乱者の拠点となり得たのである。そこで新に規程を定め、廟舎は二百間を越えないこととし、ラマは多くて三百、少ない所で十余人に制限し、毎年二回調査する。首領ラマには官庁に誓詞を出させ、蕃民の生産物はすべて地方官に管理させ、各寺院の所要を計って給することとした。且つラマには衣料、銀も与え、良否を常に分別することにした。またこの地方で最大の寺院たるクンブムについては、その老成なるラマ三百人を選んで大將軍の印信を

給し、厳しく戒律を守らせ、これを定例とした(前掲書)。即ちラマ廟の大き、ラマの員数を制限し、首長を定め、農民への支配を止めさせ、その生活は政府で保証する態勢をとったのである。

以上は前述のごとく、年羹堯の善後策で施行されたもののうち、特に重要なものを抜出して整理したものである。それは概括すれば次のごとくなるであろう。青海タイジ等はこの前後策によって旗制に縛られ、これより後、特に強力な世俗的指導者を持つことはできなくなった。ラマ等はその生活の殆どを地方官庁に仰ぐことになり、宗教的な封建支配の経済基礎を失ってしまった。西蕃人等は従来の支配階級から切離され、租税は清朝の衙門に納めることになり、これまでの支配者等と共同行動する絆を断たれたのである。もはや彼等が丸一となって外的勢力に当る基礎は、上下ともに失われてしまった。尤も王侯もラマも従来の社会的な高い地位から急速に引きずり降されたわけではない。否寧ろその特権的な地位は依然として彼等の掌中に存したのである。王侯等は、その世俗的な尊敬は変ることなく受けたし、ラマ等は宗教的權威を確に保持し続けた。しかしそれらは彼等が自ら作り出したものではなくて、清朝によって与えられ、清朝によって保証されたものに他ならなかった。しかも自らの支配者乃至は指導者を生み出し、または選択する権利は彼等に認められなくなったのである。

年羹堯の善後策は、当面の青海問題の処置策として終始しているものである。しかし青海問題は一方でチベット問題に深くかかわり合っている。ロブザンダンジンの反乱の真の目的は、自らがラザンハンの後を継ぐことであり、それはとりもなおさずチベットにおけるホシヨトの權威の復活であった。とすれば本来ロブザンダンジンは康熙五十六年にラザンがラサで殺されたとき、直に青海ホシヨトを糾合してラサに乗り込み、侵入のジュンガル軍を討伐すべきであった。それを敢てなさなかったのは、自らの実力の限度を知っていたからであろう。さればこそ、清朝の大軍がラサに向うとき、自らイニシャティヴをとることなく、ただそれに従軍して漸くラサへと進んだのであろう。しかしその程度の実力ではチベットにおけるホシヨトの復権など呼号する資格はない。前述のごとく常寿の調査によれば、彼はジュンガルと連絡をとって

いたが、ジュンガル人は殆ど青海人を信用していないということであつた(九頁)。同じオイラートの遊牧民の間でも青海ホシヨトは既にその実力についての信頼を失っていたのである。

一方同時に、清朝も早くからロブザンを含めての青海タイジ等の離合集散を経験して、強力な統制を行える、ホシヨトの中心人物を発見することはできなかった。年羹堯は、ロブザンについて、「その為人は成見がなく、怨を同類に結び、衆心は服しない」といい切っている(奏摺上、二三頁)。従つてラザン一家が滅亡してみれば、それに代る指導的人物はホシヨトには見当らなかつたのである。否寧ろラザンの例に見るごとく、清朝からすれば、統制力のないホシヨト部長の存在こそチベットの政局を混乱させる原因に見えたかも知れない。同じホシヨト出身のロブザンが、清朝を頭に戴いてチベットに号令することは、可能性としてあり得たであろう。しかしその実力の程が問題だったのである。もし清朝の力がチベットに及ばないならば、政局の変動はなお塞外異民族の手に残されている可能性はあつた。しかし康熙五十九年のラサ遠征は、清朝の軍事力がチベットの心臓に容易にとどくことを証明した。願るとゲルグバは、それを保護する軍事力を常に外部の異民族に求めてきた。ラザンを頂点とするホシヨト勢力が既にその力を全く失つたとき、清朝は実力を以てその保護者となる充分な資格を主張したのである。清朝の軍隊に追従してきた青海タイジ等に、ゲルグバの最高の保護者たることを主張する資格等は全く認められなかつたのである。ロブザンの反乱に従つた青海タイジの数は少なく、青海ホシヨトによるチベット支配の夢は消滅した。チベットではチベット貴族による、ドライラマ下の政権が再建され、再びこの政権がホシヨトの影響を受けることはなくなつたのである。グシハンの打立てた華かなラマ教王国もラザンハンで一応その幕を閉じ、その後継者は永久にホシヨトからは出ないことになつた。この後、青海タイジ等は内蒙古なみの清朝の封建体制に組入れられ、青海ホシヨトの歴史に残る活動は、このロブザンダンジンの反乱を以て完全に終止符を打つたのである。

① ダシハンの第六子ドライバートル・ドルジの子薩楚畢爾根台吉の第

三子噶爾丹岱青諾爾布であらう。ガルダンダイチンは称号で、ノルブ

Norbu Hanorbu が名と考えられる。

② このアラブタンはバートルホンタイジの子ヨリクトホシヨチ<sup>○</sup>。

- riyu qosiyuci の孫で、青海の非ホシト族としては最も早くから旗制を認められていた。康熙五十五年(一七一六)に一等台吉を授けられ、旗を編成し、ジャサクになっていた(表伝巻八六、四丁裏)。
- ③ ノヤンゲロンは、青海トルゴト部西旗の祖セテルブム Seturbun (Tshe thar bbum の父オルチ Oct (鄂爾濟)である(奏摺下、八六三頁)。彼の後はノルブ Norbu (諾爾布)が継いだ。雍正九年に反乱を起し、その弟のセテルブムが更に後を継いで西旗のジャサクとなった(表伝巻八九、五丁裏)。
- ④ ジクシジャブの系統は二一註⑤で説明した。実録卷二〇、二七丁裏、二年五月戊辰の条では、済済克扎布とあるが、済済克扎布が正しい名であらう。
- ⑤ 常寧湖は要略卷一一、一四丁表には昌甯湖とあるが、同書卷九、一四丁裏の拉都親のアラシャンの説明に出てくる昌甯湖とすれば、甘州の東北にある長寧湖であらう。恐らくアラシャンヘルートの遊牧地の一つであったと考えられる。本文はその地帯からシャラタラを通じて西寧に達する交通線を想定しているものである。
- ⑥ 扁都口は、十三排図では大通衛の西方にあり、新志卷一、西寧府輿地図の大通衛図でも、衛の西方に存在する。
- ⑦ 洮資河(実録卷二〇、三二丁、洮資河)は青海省の西辺祁連山 Tainai ayula に源を發し、甘肅の西を通る河で、中國では臨水または北大河と称する。十三排図では洮來河と書かれている。常瑪爾(実録同上、常瑪爾)は、十三排図でヘーライ河の上流にある長馬色欽であるが、またこのオドントラは黄河源のオドントラはあり得ない。これもヘーライ河の上流にあつたと思われ、位置は比定できない。
- ⑧ アポーはタシハンの孫ホロリ(Orolid)和羅里(和羅理)の子で、康熙代のガルダン征討、テメット問題に、軍を率いて力を致したので、その功により多羅郡王に晋された。年羹堯とは不和であつたが、その

とは既にペテック氏が注意している(Notes, p. 288)。表伝巻七九、一七丁表、卷八〇、九丁表にもその塞外における具体的な活動が記されている。

- ⑨ この二水の位置は、十三排図に、中衛県の北長城を隔てて駅名を記し、營盤水頭、長流水頭とある所であらう。

〔略語表〕


- 実録—大清世宗実録  
 朔漠—親征平定朔漠方略  
 方略—平定逆噶爾方略  
 要略—祁韻士：皇朝藩部要略  
 表伝—外藩蒙古回部王公表伝  
 新志—楊應瑞：西寧府新志  
 遊牧記—張穆：蒙古遊牧記  
 奏摺—年羹堯奏摺、上中下三卷、台北、一九七一年  
 同文志—西域同文志(東洋文庫複製本)  
 十三排図—清十三排図、九排西二、蘭州府、西寧府圖  
 青海史—Sun pa mkhan po, Mts'ho shon gyi lo rgyus, edited by Lokesh Chandra, Vaidūya-ser-po, Pt. II, Satapitaka vol. 12, New Delhi, 1960.  
 CT=L. Patech, China and Tibet in the Early 18th Century, Leiden, 1950.  
 Notes=L. Patech, Notes on Tibetan History of the 18th Century, Young Pao, vol. LII, Livr. 4-6, Leiden, 1966.  
 GT=T. Wylie, The Geography of Tibet according to the 'Dzaming-rgyas-bshad, Rome, 1962.  
 AK=Ho-chin Yang, Annals of Kokonor, Hague, 1969.

STR = Z. Ahmad, Sino-Tibetan Relations in the Seventeenth Century, Rome, 1970.

【付記】

乱の討伐における年羹堯の活動については、最近、右の略語表に出る

「年羹堯奏摺」が出版され、一層明かとなった。ただこの書を私が入手したときには本稿が既に成っていたため、漢文の史料のみしか参照し得なかった。該書の半ばを占める滿文の史料については、いずれ專家の研究の行われるのを俟って検討したいと思う。

(京都大学文学部教授・)



## On the Revolt of *Blo bzan bstan hdsin*

by

H. Sato

We have not so many studies on the revolt of *Blo bzan bstan hdsin* in the *Ch'ing-hai* region 青海 in 1723 under the reign of *Yung chêng-ti* 雍正帝. The general history of the *Ch'ing* dynasty 清朝 describes it only as a minute revolt in the frontier.

The *Ch'ing* dynasty, however, by defeating the revolt, proclaimed the *Qosirun* System 旗制 in this region for the first time and succeeded in taking this area into its territory.

This article, after investigating the cause, the process and the effect of this revolt, will show that after the conquest of the *Ch'ing-hai* region by *Guši qan* the activity of the *Qosirud* tribe came to a final end.

## The Process of the Establishment of State-Area in Thailand; Around the Time of *Chakri* Reformation

by

S. Tanabe

The advancement of the Western colonial powers in the late 19th century had caused a radical change in Thailand society under the old regime of *Ratanakosin* dynasty. *Chakri* Reformation can be characterized as a series of domestic reform which was launched by *Chakri* royal court headed by *Rama V Chulalongkon* in response to the impact of the Western colonial powers as a direct motivation. They perceived the pressure from the outside upon *Prathetsarat* (tributary chiefdoms) in the frontier as a danger to the existence of state and were forced to reform the administrative form of state-area which was composed of *Huamüang* (provinces) under the old regime. The reform of provincial administration in response to the pressure from the outside was launched by *Kasuang Mahatthai* (ministry of interior) headed by prince *Damrong* and kept bringing the centralized administration through integrating the